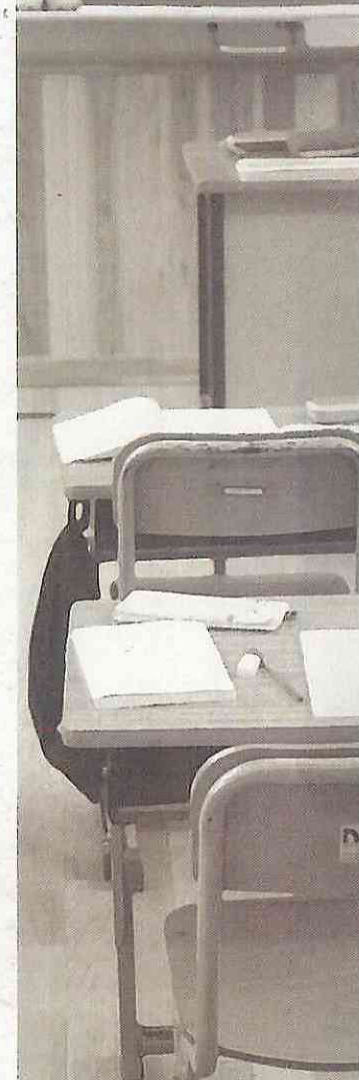


「知の創造」としての授業を目指して－主体的な学びを支える授業改革の展開－

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 淑子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7839



「知の創造」としての 授業を目指して

—主体的な学びを支える授業改革の展開—



松田淑子
福井大学教授

「はじめに」

「六つの謎」の授業から」

「これはいくらだと思えますか？」
私が身に着けていた「ハートのラリエット（ひも状の装飾具の総称）」（写真）を学生に見せて問いかけた。

糸で編まれたそのラリエットは、かわいものだが、それほど高価なものには見えない。学生たちは「五〇円」「一

〇〇円」「三〇〇円」などと口々に言うが、一〇〇〇円を超えるという者はほとんどいなかった。

「私はこれを三二〇〇円で買いました」と言うと、「えー」との声が上がった。「なぜでしょう？」これを第一の謎とし、表に示した六つの謎（表参照）を簡単なヒントとともに提示した。そして、それぞれの謎を調べる人数が均等になるよう配慮しながら、全員に好みの謎を一つず



写真 ハートのラリエット(EAST LOOP)

つ選ばせた。最後に、次回までの課題として、自分が選んだ謎を調べ、プレゼンテーションできるように準備することを告げた。

六つの謎はどれもインターネットで調べればすぐに検索できるものばかりだが、「それをどこまで広げ、深め、探究していけるか、そしてうまく伝わるようにプレゼンできるかが、あなたの腕の見せどころ」「最後に必ず考察を入れること」と付け加えた。

ちなみに、この「ハートのラリエット」には、「EAST LOOP」というタグが付いており、それを手かりに調べることができる。東日本大震災の被災者の方々が「仕事」としてつくっているもので、価格の半額が手取りの収入と

- | |
|-----------------------------|
| ①「ハートのラリエット」
(EAST LOOP) |
| ②「Table for Two」 |
| ③「レインフォレスト・アライアンス」 |
| ④「エシカル・ファッション」 |
| ⑤「apバンク」 |
| ⑥「社会起業家」 |

なっている。一つ一つのラリエットにはつくり手の名前（ニックネーム）が添えられており、フェイスブック上では、つくり手と買い手の交流も繰り広げられている。

次時には、それぞれ異なる謎を調べた六人が一組のグループをつくり、報告し合った。その後、六つを貫くコンセプト、つまり背骨となる概念をグループで考え、三〇字程度にまとめることを課題とした。一人一人が疑問に思いながら調べた知識とそこから導き出した考察をもとに、学生たち六人の協働で、共通するコンセプトと言う「新しい知」を創り上げるのだ。

多くのグループのコンセプトには、「持続可能性」や「社会貢献」「未来を創る」などの言葉が並んでいた。

当然のことながら、しっかりと調べてきた学生の多いグループはコンセプトをつくる議論も活発になる。このような授業は、学生一人一人が学びの主体者として自覚的に取り組むことができるか、そして、協働して相互に学び合い、どれだけ解を高めることができるかが重要となる。教師がひたすら知識を与え、学生は受け身となっている授業で身に付く力と

は異なる力が必要となる。受け身の授業に慣れ切った学生の中には、抵抗感をもつ者も少なくない。手っ取り早く「正解」を教えてほしいと思うのだろう。そしてその抵抗感は、実は学生以上に教員側に強い。

周知のように、すでに児童・生徒・学生が主体的に考え、能動的に学び合うことを重視した授業改革・教育改革が推進されている。昨年八月には中央教育審議会から二つの答申、「教職生活の全体を通じて教員の資質能力の総合的な向上方策について」「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」が示された。小・中・高等学校の教員の資質向上と、大学の能動的な学修への転換が、教育改革の鍵を握っているからだ。

次章では、それらの背景や成果について、実践事例に基づきながら確認したい。

「1」 次代への挑戦

学校全体で問題解決型の授業を展開している福井市至民中学校の大橋巖先生（当時。現在は福井市森田中学校教頭）

フロントライン
教育研究 「知の創造」としての授業を目指して
—主体的な学びを支える授業改革の展開—

は、「二一世紀の世界をリードする国は、アメリカか中国か？」という論題で社会科学の授業を展開した。班ごとに情報交換や討議をしながら個人探究を進めレポートを書き、最終的にはグループの結論をまとめていくという授業であった。班の中で生徒たちが互いの意見を取り入れながら自分自身の「問い」と意見を進化させ、最終的に統合させていく様子は、大人数負の思考プロセスであり、導き出した結論と理由には目を見張るものがあった。あるグループが中国を選んだ理由は「経済成長」と並列させ、アメリカに比べ「貧富の差が少ない」ことや「人種差別が少ない」ことであった。さらに、「環境問題や食料自給率の低さの解決」を「必要条件」として付加していた。

私たち大人は、この中学生の提言に何を学ぶべきだろうか。そして、私たち教師は、このような中学生の学びを支える大橋先生の授業に何を学ぶことができるだろうか。

【学習組織論】で著名なピーター・センゲは、「学習」の目的が「企業が革新性や収益性を高めるため」等を超え、「工業化時代のしがらみを断ち切り、生

命が輝く持続可能な世界をつくるため」という、より高次のものになったと述べている。

これからの社会を創る若い世代は、これまでの発展や経済最優先の価値観の中で膨らみ続けた「ツケ」、まさに至民中学校の生徒たちが示した解決すべき問題、複雑に絡み合った諸問題を、皆で解決しあかざる意味で持続可能なものに変えて行かねばならない。持続発展教育を基盤とした教育改革が求められる中で、大橋先生の授業のような、生徒たちが主体となり、協働して「新しい知」を創り上げる授業が強く求められる。

一方、すでにそのような子どもたちの力は、今現在の大人たちや社会をも変えていく力となりはじめていく。

横浜市立大岡小学校では、長年にわたり「総合的な学習の時間」と「生活科」を中心に、子どもたちの学びを追究してきた。今年一月に開催された公開授業研究会でも、子どもたち一人一人が自分の「問い」をもち、学びの主体者であるという自覚をもって授業に臨んでいた。重要なことは、それがどこか一つのクラスだけではなく、学校全体の「文化」として定着していることだ。そしてその根底

には、互いの授業を検討し合い切磋琢磨する教師の同僚性、協働の学び合いがあった。子どもも教師も共に主体的に学び合う「文化」を、大岡小学校は長年の積み重ねによって育み続けているのである。

研究会では、公開授業に続き、文部科学省の田村学氏らをシンポジストとしたシンポジウム「総合は子どもの何を育てるのか」が行われ、終始ダイナミックな議論が展開された。その終盤において、文教大学の嶋野道弘氏から、それぞれのクラスで地域の大人たちが授業に関わっていることについて、「この地域ではなぜ次々と新しい材に協力できる方が出てくるのか？」という興味深い質問が出された。それに対する永野理英子研究主任の回答は、「この地域には確かにたくさん素晴らしい方々がいらっしゃる。でも、はじめからその方々が見えていたわけではない。子どもたちの本気が素敵な大人を見付け出し、そして大人たちを動かしたのです」というものであった。

子どもたちの学びのエネルギーは、もうすでに社会を変える原動力になっている。地域の方々を、知の創造の授業に巻き込むことを通して、学校と同時に地域

社会をも盛りたてているのである。

【2】

福井大学の取組

さて、大岡小学校で見られたように、児童中心の学びへの転換は、学校全体での取組が重要であり、そのためには教師の同僚性に基づく、協働の学び合いの継続が必要となってくる。

教育改革の実現を目指す福井大学教職大学院の現職教員の院生は、学校を離れることなく、自身の勤務校を実践研究のフィールドとしている。日常の中で授業改革を基軸とした学校改革に取り組むことこそを、院生の学びととらえているからである。そのため、通常は、大学院スタッフが発生の学校に出向き、実践に伴う模索を共有している。そして、休日や夏季・冬季の学校休業期間には、院生たちが大学に集い、大学院スタッフや他の教育関係者等と共に、少数教グループの中で実践を省察的に検討し、実践記録としてまとめる機会をもっている。

一方、大学院スタッフ自らも、現職教員の院生や、インターンをしているストリートマスターの院生たち一人一人の取組を互いに共有し省察し合ったり、自分

自身の研究者としての学びを報告し合ったりしている。そのための時間を毎週確保し、大学教員としての資質向上のためのFD (Faculty Development) に取り組んでいる。

さらに、年に二回開催されるラウンドテーブルでは、学校関係者のみならず、実践的に改革を推進する人が全国から集い、結び付くことにより、学び合いのネットワークが張り巡らされている。

このように、主体的な学びへの転換を推し進めるには、協働的な学び合いを支える構造が、幾重にも重なり合っていることが重要であり、福井大学教職大学院は、その拠点となることを目指している。

【おわりに】

本稿では、時代の転換に伴う教育改革について、大学、中学、小学校、教職大学院での実践例を基に、特に授業改革に焦点を当てて考察した。

教育は未来を創る営みである。一人一人の幸せを保障する持続可能な未来の構築のため、主体的な学びへの転換を進め、「知の創造」としての授業を目指していきたい。

(まつだ・としこ)

【参考・引用文献】

○ピーター・センゲ他著「持続可能な未来へ」日本経済新聞出版社、二〇一〇年

○遠藤貴広「教育地域科学部における教員養成カリキュラム改革の現状」教職実践演習の開成と教員養成スタンダードの策定」福井大学高等教育推進センター年報、第二号、三二二頁、二〇二二年

○大橋巖「二一世紀の世界をリードする国は、アメリカか中国か？」世界の国々の調査」福井市至中学校研究紀要二〇一一年
——学びと生活の融合——生涯学習へのスタートを切る——、九八—一〇四頁、二〇一一年

○八田幸恵「国語科における『ふりかえり』を核とした課題探究プロセスのあり方」高校国語科現代文「こころ」の授業研究を通して」福井大学教育地域科学部紀要二〇一一年九頁、二〇二二年

○拙稿「知の創造の場」としての大学共通教育の授業にむけて——消費社会と私——の授業実践を事例として」福井大学高等教育推進センター年報、第二号、一二七—一四〇頁、二〇二二年

○柳沢昌一「実践と省察の組織化としての教育実践研究」日本教育学会「教育学研究」第七八巻第四号、四二二—四三七頁、二〇二一年